The Japan-Bhutan Friendship Association Newsletter
日本ブータン友好協会会報　2017年 6月　NO.135

ブータン
The Japan-Bhutan Friendship Association

眞子さまがブータンを公式訪問

秋篠宮家のご長女、眞子内親王殿下が、6月1日から7日まで（日本発着は5月31日から6月8日まで）ブータン王国をご訪問された。1日午前10時半過ぎ（日本時間13時半過ぎ）、パロ空港にご到着された眞子さまは、ブータン国王の妹君でいらっしゃるアジ・ユーフェルマ王女（Her Royal Highness Princess Euphelma Choden Wangchuck）のお出迎えを受け、首都ティンプーへと移動され、同日午後には、平松駐ブータン大使（駐インド大使兼轄）とともに、民族伝統博物館を見学された。

翌2日は、タシチョ・ゾンにおいて、ブータン国王陛下ご夫妻を表敬訪問された後、ご夫妻がお住まいのリンカナ宮殿において昼食会が催された。また、午後には、昨年2月にお生まれになったばかりのナムゲル王子とご一緒に、宮殿の庭園を散策される様子が、ブータン王室メディアによって伝えられている。その後、ティンプー市街へ移動された眞子さまは、時計塔広場において、日本週間の開会式に参列され、ブータン人の若者による柔道や空手の披露、小学生による日本の歌の合唱の様子をご覧になった。その夜、平松大使主催の晩餐会では、「ブータンを訪れるのは小さい頃からの夢でした」とスピーチされたと、地元紙Kuenselが報じている。

クエンセル6/7より　キラをお召しの眞子さま

ご滞在3日目は、ティンプーのチャンリミタン・スタジアムを訪れ、ブータンの伝統的なアーチェリーを体験された。このときお召しになられていた赤いキラは、1997年、眞子さまのご両親である秋篠宮ご夫妻がブータンを訪問された際に、前国王である第4代国王陛下から紀子妃殿下に贈られたものでした。このあと、その第4代国王陛下との昼食の席では、陛下は眞子さまのお姿に大変感激されたとのことである。この日はその他に、王立織物博物館の見学、ブータンに派遣されているJICA・青年海外協力隊員を激励された。

6月4日は、メモリアル・チョルテンにおいて開かれた、花の博覧会の開会式に臨まれた。花の博覧会は、過去2回は国際空港のあるパロにて開催されてきたが、今年は舞台をティンプーに移して開催され、ブータン以外にも、インド、タイ、日本から造園の専門家が当地を訪れ、それぞれに趣向を凝らした庭園を準備した。開会式には、国王ご夫妻、前国王をはじめとした多くの王族が一同に集い、ゲストである眞子さまは振り袖をお召しになり、華やかな会に一層の花を添えておられた。午後にはパロへと移動し、古刹キチュ・ラカンをご参拝された。

5日目は、まず、パロ谷を見下ろす高台にある西岡チョルテンへと向かわれ、ダショー西岡に直接師事した男性とともに、ダショーが農業指導を行った水田を視察されるなど、ダショーの足跡を辿られた。また、ブータンの伝統的な農家をご訪問されたり、パロ・ゾンや国立博物館をご見学されたりす

P8へつづく

タイとブータンをつなぐもの（その1）

日本ブータン友好協会会長 小島　誠二

ブータンとの出会い

（最初の出会い）

1986年3月から3年間マニラにあるアジア開発銀行（ADB）に出向していたことがある。その間1988年2月工業団地整備プロジェクトの審査ミッションの一員としてブータンを訪問した。当時はADBの本部があるマニラから出張する際は、どこに行く場合もバンコクを経由することが普通であり、ドゥシタニ・ホテルが定宿であった。この時のミッションは生涯で思い出深いものとなった。あわや墜落事故に遭遇するところであったからである。事件は、インドとブータンとを結んでいたドルニエ機（ドイツ製、18人乗り）が鳥を吸い込んだことにより、緊急着陸したというものであったが、お蔭でインド西ベンガルのバグドグラから、インドとの国境の町プンツォリンを経由して、真夜中に首都ティンプーに到着するという得がたい経験をすることになった。

（二度目の出会いはインドで）

1994年9月から約3年間、在インド日本国大使館に参事官、その後公使として在勤した。同大使館は在ブータン大使館を兼轄しているので、当然在デリー・ブータン大使館との間には頻繁な往来があった。ブータン大使館と農業開発、橋梁建設、電話網整備などのプロジェクトを協力して進めていったことを覚えている。ナド・リンチェン駐印ブータン大使（駐日大使）と親交を深めることとなる。96年3月にはブータンに出張する機会もあった。日ブータン友好協会会長のポストには、インド大使を務めた外交官がつくことが多かったが、この時の縁があって、私のところに就任の要請が来たものと想像している。

（協会会長就任は三度目の出会い）

日本ブータ友好協会は、会員約200数十名という小さな組織であるが、70年代からブータンに通い始めた方、日本で放送された映像、出版された文献をすべて所蔵しておられる方、ブータン紀行番組制作の草分け的な方、ブータンの中をくまなく回った経験のある方、ブータンに長年在勤された方、青年海外協力隊員としてブータンで活躍された方、ブータン人と結婚しておられる方、ブータンについて著書のある方、ブータン研究者など、ブータンについて深い知識と関わりのある方が多く、その意味では強固な基盤がある。ブータン研究については、日本ブータン研究会、GNH研究所があり、当協会とはお互いに協力し合って研究とその成果の普及に努めている。これらの方々や組織の関係者から日々ブータンについて教えていただいている。

ブータンとタイの親密さと共通性

ブータンのことを少し勉強してみると、筆者が大使として滞在したタイとの関係が深いことが分かる。両国は、1989年に国交を樹立した後、ブータンは数少ない大使館の一つをバンコクにおき、タイはブータンに領事館を置いている（在バングラデシュ・タイ大使館がブータンを兼轄）。両国は、特に文化面での関係が深く、プリンス・ソンクラ大学、ランシット大学などでは、ブータンの学生が学んでいる。そのような緊密さの背景には、両国の共通性も寄与しているように思われる。まず、いずれの国にも、国民に敬愛される国王の存在があり、両国とも仏教徒が多数を占める国である。ブータン第4代国王陛下（1972年から2006年まで在位）のGNH（国民総幸福量）の考えも、プミポン前国王陛下の「足るを知る経済」も、いずれも仏教の教えが背景にある。

（王室を戴くブータンとタイ）

タイ国王がタイ国民から敬愛される存在であることは改めて書く必要がない。他方、ブータン国王については、世銀の南アジア担当副総裁を務め、第4代国王陛下にたびたび拝謁された西水美恵子さんが、「世界中で最も会いたいリーダーはだれか、とよく聞かれる。躊躇せず雲龍王三世の名を挙げる」と書いておられる。同元副総裁は、第3代国王陛下の政治改革断行を高く評価しておられる。第4代国王陛下が退位される際には、ブータン国民がこぞって早すぎるご退位を惜しんだ。現国王（第5代）のご見識やお人柄については、2011年11月王妃陛下とともに、国賓として訪日された機会に日本国民がよく知るところとなった。タイでは、昨年12月に即位されたワチラロンコン国王陛下が新たな国王像を描いていかれることになろう。

（地方を行幸される両国国王）

プミポン前国王陛下は、1955年に初めて東北地方に行幸され、その後1958年北部、1959年南部へ行幸され、1980年代に最も多くの国内行幸をされた。若いころ、年間20回以上の地方巡幸

をされたようである。ブータンの第4代国王陛下も、「雲龍王の足跡がない村はない」と言い伝えられるほど全国をくまなく行幸された。西水さんによれば、それは、「酸素の薄い大気にあえぎ、雨季には蛭に血を吸われ、蚊や蚤に悩みながら、野宿を強いて歩き続け」るというものであった。また、西水さんは、行幸の目的について「改革の原点に戻ろうと、国王は旅に出た。一人でも多くの民の心を聴こうと、国中を歩き回った。国家安泰の根源を見つめつつ、村から村へと訪れた。」と書いておられる。特に南部については、第4代国王陛下は、南部人を差別しないとの政策を説明するためくまなく回られた。このように行幸を重視する先代国王のお考えは、現国王陛下にも引き継がれているようである。

（仏教徒の国、タイとブータン）

（憲法上の地位）2017年4月に公布・施行された新憲法では、2007年憲法と同様、タイ国民に信教の自由は認められるが、国王は仏教徒であり、宗教の擁護者であるとされている。ブータン憲法においても、信教の自由が保障され、国王は仏教徒であることがその地位に在るための要件とされている。また、寺院組織及び出家者についての定めが存在することからも、仏教がブータンで特別な地位を占めていることが分かる。

（上座部仏教と大乗仏教）タイでは90%以上の国民が、ブータンでも70%以上の国民が仏教徒である。私の高校の同級生であり、日本におけるブータン研究の第一人者である今枝由郎さんの説明によれば、タイの仏教は、「南伝大蔵経」を典拠とするテーラヴェーダ（上座部）仏教であるのに対し、ブータンの仏教はチベット語訳大蔵経に基づくチベット系仏教である。今枝さんは「テーラヴェーダ仏教は初期の仏教の形態・教義を継承しており、中国系仏教とチベット系仏教は、それより一層発展した段階の仏教であり、一般に大乗仏教と称される」と書いている。

（タイ仏教とブータン仏教）このことから、ブータン仏教とタイ仏教との違いの方がブータン仏教と日本仏教との違いより大きいことになるが、国内のいたるところで僧衣に出くわ

P8へ続く

日本ブータン学会設立

平山　雄大

2011年より、ブータンをフィールドに研究を行っている若手研究者や大学院生が日頃の研究成果を披露し意見交換を行う場として、毎年5月に「日本ブータン研究会」を開催してきました（事務局：須藤伸・平山、2013年からは日本ブータン研究所が主催）。今後も継続的に研究会として実施していくという道も検討しましたが、このたび、ブータンを対象とする学術的研究のさらなる発展及び普及を目標に、より多くの皆さまのお力をお借りし「日本ブータン学会」を設立することになりました。

アジ・ケサンの87回目のお誕生日である2017年5月21日（日）、早稲田大学にて日本ブータン学会第1回大会及び設立総会が開催されました。研究大会は、3本の発表（各30分）＋全体討議（1時間）が午前と午後に1セッションずつ行われ、63名の参加者のもとで活発な質疑応答が展開されました。発表タイトルと発表者は次の通りです。

■「ブータンの情報社会—新しい情報社会論構築に向けて—」　藤原　整（早稲田大学）

■「ブータン仏教とそのルーツ—ドゥク派開祖ツァンパギャレー（1161-1211）を中心に—」　熊谷　誠慈（京都大学）

■「オレカ語の言語的特徴について」　西田　文信（東北大学）

■「日本で暮らすブータン人技能実習生の生活に関する人類学的研究」　栗田　陽子（東北大学大学院・院生）

■「20世紀前半のブータン人と近代教育—シッキム政務官報告書の分析を中心に—」　平山　雄大（早稲田大学）

■「「死の谷プナカ」の謎—土地行政の観点から見るブータンの政治—」　月原　敏博（福井大学）

設立総会では会則、役員、事業計画、収支予算の承認が行われ、栗田靖之会長（国立民族学博物館名誉教授）のもとで運営を行っていくかたちが整いました。学会事務局は早稲田大学の私の研究室内に置、当面は私が雑務を担当いたします。今後、学会誌の発行や研究大会の開催等を通して、ブータン研究のプラットフォームとしての役割を果たしていく所存です。ご指導・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。入会案内や各種情報は、近日開設予定のウェブサイトに掲載いたしますので、お時間よろしいときにご確認ください。

※日本ブータン学会ウェブサイト（近日開設予定）

http://www.bhutanstudies.org/

「韓流ブーム in Bhutan」は続くのだ

在ティンプー　青木　薫

6月16日の夕方のティンプーは、少々殺気立っていた。若者たちは携帯片手に走り回り、何か叫んでいる。それというのも、若者みんなが楽しみにしていた「韓国スーパーコンサート（韓国ブータン外交30周記念行事）」がキャンセルになったというニュースが流れたからだ。

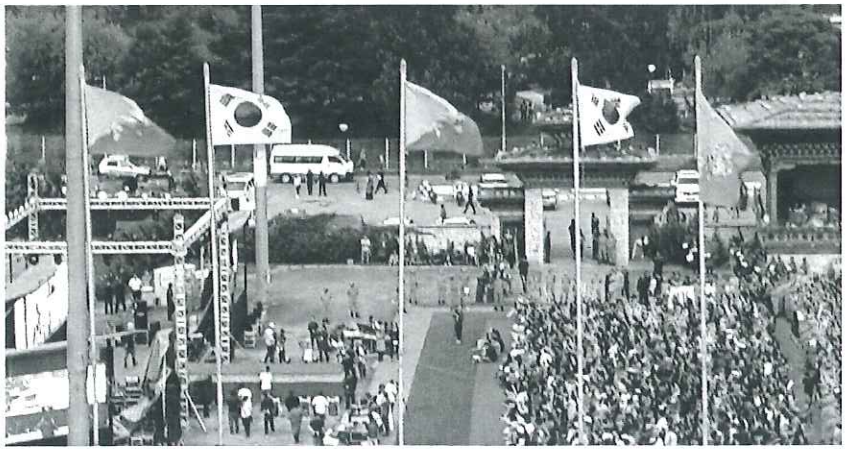
このコンサートの前人気は尋常ではなかった。コンサート開催予定のニュースが流れるやいなや、ちょうど一学期の期末テストと重なっていることもあり、学生たちは教師に試験時期を変えてほしいと直談判に及んだらしい。いや、当校でも17日は中間試験の日だったのだが、試験日や時間を変えてほしいと、日ごろは無口な学生がたどたどしい日本語で迫ること迫ること。最初は英語での直訴だったが、私の「日本語でどうぞ」との一言に、日本語初級の学生たちが知恵を出し合い、必死の直訴。「先生、時間をかえます。」「コンサートに行きます。」「朝、テストです。」「よろしく、おねがいします。」などなど。あらら、やればできるじゃないのと感心したくらい、それは活発に日本語で訴えてきたので、午後予定の試験を午前11時から実施することにする。

さて、コンサートのチケットはTCB（政府観光局）が配布販売したのだが、まあ、こんなにたくさんブータン人がTCBにいるの初めて見ました～！という状況。ブータン人はIDカードを登録し無料チケットを入手、外国人は有料。6月17日の午後3時より、場所はチャンリミタンと、みんなが楽しみにしていた。かくいう私も、Mr.PSYが新曲を引っさげてブータンにやってくると聞き、とても楽しみにしていた一人。ブータンは国を挙げてK-popスターたちを待っていた。その広報の手腕たるや、もう派手でタイムリーでコンサートのことは一瞬で国中に広がり、6月第一週に開かれたJAPAN Weekの余韻が吹っ飛んでしまったのだった。

そこへもってきてキャンセルのニュース。実際はコンサートのキャンセルではなく予定されていたK-popグループ6組のうち、Mr.PSYを含む5組がドタキャン。他のアイドルがやってくるとのこと。ブータンのSNSは一瞬に、K-popスター憎しの嵐が吹き荒れた。

ところで、ブータンにおける韓国ブームは今に始まったことではない。早くは5人だったころの「東方神起」、現国王戴冠式のころには「スーパージュニア」と、ショップではポスターからマグカップ、キーホルダーなどのアイドルグッズが並んでいた。2011年にブータンに撮影にやってきた「嵐」の相葉君は、町のCDショップで誰一人「嵐」を知らないことにがっかりしていた。日本のアイドルは肖像権が厳しすぎることもあってブータンでは全く無名。これはとっても残念である。翻って韓流はその後もアリランテレビのドラマもブレイク。何しろセリフは韓国語音声で、字幕は英語という、アジアのいやブータンの肝を押さえた放送なのである。強烈な韓国ファンの若者のなかには、英語やゾンカに交えて、普通に韓国語を使うグループもいるほどだ。今BBSで日本のフジテレビのドラマ『マルモのおきて』も放送されているのだが英語音声だというのは、本当に残念。せめて日本語音声＆英語字幕だったら、もっと日本語や日本ファンが増えるのにと残念に思っている。

さて、一夜明けた17日。チャンリミタン競技場には、テコンドーのときに使われるマットがしきつめられ、りっぱなステージも組みあがった。今夏大流行の兆しのある肩だしファッションに身を包んだ女の子たちは、昼前からチャンリミタン周辺に集合してくる。ティンプー市はチャンラムを通行止めにして万全体制。オレンジつなぎのデフンスの人たちも会場整理と警備に続々集まってきた。



午後3時に開始

政府は教師の辞任に懸念を抱いていない

2017年最初の４ヶ月で200名の教師が自主退職したことは懸念材料であり、この傾向はここ数年変わっていない。昨日ツェリン・トブゲィ首相は記者会見を開いた。

ここ８年の減少率にみても、この４ヶ月200名の自主退職という数字は例年より多い。首相は統計をみせながら、2016年200名の教師が辞職したことを記者団に説明。2015年には142名が辞職している。

「今年は教師8562名中200名がすでに辞職している。これは教師全体の2.4%にあたる。」首相は2015、2016年を除いて、この傾向は程度の差はあるものの変わっていないと話した。政府はこのことについて懸念すべきではないか。これに対して首相の回答は、「『はい』とも『いいえ』とも言える。この国にとって訓練を受けた教師の辞職は教育システムにおいて損失ということで懸念を抱かなければならない。しかし、政府はいくつかの理由から心配をしていない。それは減少率の数字からするとこの教師の辞職率は他と比較すると少ない。また、絶対値としての200という数字は多く感じられるかもしれないが、これは全体の2%にしかならない。今年はこのままだと辞職が増えるかもしれないが、それは数字の上で感じられるだけで、公務員ということからすればこれは普通だ。国としてこのことに懸念する必要はないと思う。ブータン国民は基本的権利で全ての人々が自らの選択により職を選び、仕事をすることが認められているからだ。」と述べた。

首相は、この辞職によって発生した教師不足は、逆に教職を専門に学んだ卒業生たちに機会を与えるとした。「辞職した教師は職場に対して不満があったわけではなく、所謂『隣の芝生は青い』ということで、私立また海外での仕事を選択した。たとえばオーストラリアは多くのブータン人にとって勉学、仕事の場として魅力的な国となっている。そこで教師の多くはオーストラリアに行き、学んでいる。これは我が国にとって、人的資源としていいことだと思う」と述べた。

政府は教師の福祉の懸念をしている、教育計画において、今後最良の教師を惹きつけて保持することを考えていかなければならない。

また、政府は教師の職場環境整備を改善する計画である。この計画では自主的に職場環境を改善し、教師の動機付けを実施している中央や自治体の学校に紹介される。首相は「教育の質は確固たる動機を持ち、その職に影響受けた教師を通して高まっていくと思う」と語った。

政府は教師への開発予算を昨年の600万NUから、今年は１億600万NUに増やした。

首相は教師の労働時間にも問題があるとし、政府は週22時間から18時間労働と変更。これは将来14時間とする方針である。「現在一人の教師が数教科を担当し労働時間が長くなっているが、これらからは一人の教師が一教科を教える環境にする。また、教師の労働時間を減らすために、教師をサポートするスタッフを募集する。今、男性または女性の寮管理者、カウンセラーなどを募集し、教師が教えることに集中できるようにし、

P6へつづく

される予定のコンサートは、午後4時になってようやくスタート。ステージがちょうど向かいのビル4階にあるうちの事務所の側に設置されたため、私はしめしめと事務所の窓から仕事をしながら見学。前座のブータンバンド「Baby Boomers」の演奏は約2時間以上つづき（私はこのバンド好きなので楽しみましたが）、韓流コンサートでなくローカルコンサートの様相。空席の目立った有料席も時間がたつにつれ埋まり、あたりが夕暮れに包まれたころ、ようやく韓国からのバンドが登場。中身と言えばほとんどが有名バンドのカバーだったにもかかわらず、日ごろエネルギー発散の場の少ないブータンの若者たちは最初から乗りまくり。いわば巨大屋外ディスコ状態で、主催者側が配った風船や発光グッズを振り回して興奮状態。黄色い歓声も飛び交い、2週間前のわが祖国の演目の対局の状況。いやしかし、エンタメは韓国に任せとけという気合の感じられる本気のステージセットアップ。証明やスモーク、花火は本格的。それに比べ出演者の力量は三軍で、もうちょっと頑張ってねと「スパージュニア」の元ファンは思ってしまう。ただ、女子12楽防もどきの「Classy」の奏でるアリランがティンプーの夜空に響く光景は素敵だったし、キャンセルしないでブータンにやってきてくれた「Bad Kiz」のダンスはとてもかわいかった。この生ステージを見たらますますK-popのファン、もっといえば韓国語と韓国ファンが増えるのは当然だよなと、事務所の窓からキラキラのステージを見下ろしながら、ちょっと複雑な日本語学校の先生なのだった。

教師全体の士気の改善、能力を伸ばしていけるようにする。減少率はあるひとつの側面である。そこで多方面から、我々は包括的に教師の質の向上、将来の教師の数を保つために努力をしていく」と首相は述べた。

クエンセル4/15

バスの乗車切符をオンラインで発売開始

ティンプーのバス停留所に行かなくても、オンラインでバス乗車切符の予約・販売が開始され利用者を助けている。これはドゥルック・ライドのジグメ・T・Y・リンジン(26歳)が始めたサービスである。

乗車客はドゥルック・ライドのサイトで出発と到着地名をタイプする。詳細を入れるとスクリーンには乗車可能なバスと座席表が表示され、その確認がされると、支払いの画面に移りバンク・オブ・ブータンのM-BOBを通して支払いを行う。

ジグメは、自身がバス乗車切符を買っているときに、このバス切符のペーパーレス化を思いついた。彼は2014年インドのバンガロールにあるダヤーナンダ・サガー・インスティテュートのB.Comを卒業、将来企業家となりたいと思った。現在不便であるバス乗車切符の予約販売をオンラインで実施したかったという。このオンライン・サービスの考えには、テクノロジーで変化をもたらせたらということが根底にあった。

「多くの人たちは、バスの切符をカウンターまで行って買うことに不便さを感じている。しかし、オンラインで買えると時間、燃料の節約にもなり、この先環境のためにもつながる」とジグメは言った。このドゥルック・ライドを始めるにあたり一年半がかかった。現在はメト・トランスポートのみでこのシステムが使える。5月6日にドゥルック・ライドのサービスが開始され、これまで6枚の乗車券が売れた。彼は今すべての公共交通機関で、このシステムが可能になるように準備している。「バス会社にこのシステムを理解してもらうことが最初の挑戦だった。すべての公共交通機関がこのシステムを使い、サポートしてくれればと思う」と彼は語った。

ジグメの事業が持続可能か否かは、人々がどれだけ喜んでこのシステムを使ってくれるかにかかっている。「きちんと使ってもらえれば、十分持続可能だと思う」と付け加えた。

またジグメは、「若者には周りを見渡し、問題を意識し、それから逃れないでほしいと思う。皆それぞれ問題を抱えている。そこで事業を通して、他の人たちの利益になるようにしないか」と、若者たちにこのような考えを世間に出す勇気を持ってもらいたいし、価値のある賢い市民になってほしいと語った。

クエンセル 5/8

ヨンプラの大学 8月第1週までに開校予定

本日、ブータン全土の総数143名に上る教師がタシガン県ヨンプラに新設される大学の英語学科修士課程の為の適性テストを受けた。

143名のうち60名はシュラブツェ大学にて受験した。残りの試験はパロの教育大学、サムチェの教育大学及びトンサの言語と文化大学にて行われた。

そのうち30名のみが現在はシュラブツェ大学によって後援されているヨンプラの新設大学院に入学できる予定である。

シュラブツェ大学の学長ツェリン・ワンディは、シュラブツェ大学はヨンプラでの修士課程の設立を支援するつもりであると語った。設立後は、大学は独立した運営に移されることとなる予定。

教育省からの行政令によると、東部での3つの新設大学設立のための基本計画の準備のためプロジェクト実行チームを設立するとのことである。チームは建設事業および2017年7月までに課程プログラムの構築を行うことを含む実行計画を監督する。

教育大臣ノルブ・ワンチュクは、ブータンジャーナリスト協会における報道関係者との月例会見にて、ヨンプラに新設される大学はシュラブツェ大学の一部ではないと語った。

行政令は更にシュラブツェ大学はヨンプラの新設校の設立のためのプロジェクト実行チームの一端を担うと述べている。チームは、大学のさらなる発展ために新しいインフラの設立や経営戦略の再構築を実行するため、ヨンプラの大学自体に運営を任せること提案している。

2011年および2012年に軍隊での使用を廃止した後は使われていなかった72.9エーカーに及ぶ政府保有のヨンプラのキャンパスは３つに分かれることになる。52.6エーカーは大学に、のこりの12.3エーカーは学校に、8エーカーは新規にRENEWセンターとなる。現時点では、幾つかの古い建物は残る予定である。

ツェリン・ワンディは、シュラブツェ大学はブータン・王立大学と第三の教育委員会と協力して、第12次5カ年計画に提案される予算によるキャンパスの設備の整備の促進の為の基本計画の作成をおこなっていると述べた。

クエンセル 5/25

監査当局、観光指針や立法を要求

国庫の第二の収入源である観光をより向上させるためには、指針や法律制定が必要である。

最新の観光業界業績監査レポートによると、観光業界を悩ます主要な弱点の一つは、立法もしくは指針の欠如である。観光のための法案及び指針の草案は2005年来議論されている。

レポートは「こういった基本的な法的文書の欠如により、一致団結した努力や方向性が見られない。それ故観光業界の発展・振興および規制ための具体的な方向性や協力を阻害している。」と述べた。

包括的な観光事業ための法律や指針がないことにより、ブータン政府観光局（TCB）は確立した標準手続きやガイドラインがないままその場しのぎの監視活動を行っている。「TCBは規則や法律の効果的な履行や協調の強化、観光活動の適切な管理のために法律や指針を定式化すべきである。」と王立監査当局（RAA）は勧告した。

「TCBはグローバルな経済発展の速度により合わせるため、その価格構成を見直すべきである」

RAAは既存の公定料金の構成の随時見直しやグローバルな経済発展の速度により素早く積極的に適応させることは、この国の経済にとって宝石ともいえる産業から、政府がより多くの利益を得る一助になるかもしれないと述べた。

「しかしながら、公定料金の見直しはブータンをハイエンドの観光客の訪問先として奨励する基本原則と目的を損ねてはならない」とRAAはレポートの中で言及した。

更にRAAはTCBに対しリージョナル観光客（訳者注：公定料金枠外のインド、バングラデシュ、モルディブ国籍の観光客）の規制のために適切な仕組みを構築・制定することを要求した。他の海外からの観光客数と比較すると、2011年来リージョナル観光客数は伸び続けている。2015年にブータンを訪れた155,121人の観光客中62.90%がリージョナル観光客であった。

しかし、RAAは2015年の観光客数は政府の収入の増加と直結していないと指摘した。2015年の総所得は、観光客数が2014年より16.21%増加したにもかかわらず、1.59%減少した。

RAAは更にTCBによる現状のホテルに対する適格性認定と評価は体系立てられた手続きによって行われていないと指摘した。適格性認定の手順は、TCB局内の質の保全手続きを含め、監督管理が行われていなかった。現行の規則の適用の矛盾が散見され、それが効果的な計画や企画の実行を阻害していると推測される。

レポートは、適切な公定料金の支払い過程を検分した結果、TCBによって旅行のキャンセルによる払い戻しのデュー・デリジェンス（適性評価手続き）が行われていないことも指摘した。

地域通商産業事務所や歳入関税局とTCBとの適切な協力が行われておらず、その結果、旅行会社の脱税が行われていた。監査チームは37の旅行会社が2015年の確定申告を行っていなかったことを突きとめた。観光産業内での当初の目的の未達も見られた。RAAは不十分な計画および実行時の適切な監督の欠如がこのような残念な仕事ぶりの原因であるとした。

2008年1月30日行政令によると観光業は主に政府によって管理されるとある。

今回の監査では、公定料金のアンダーカット（*公定料金より廉価でのツアーの組成）など好ましくない活動が生じることを防止・制御するための内部管理の有効性を評価することで、政策目標である「ハイボリュームローインパクト」を達成するために法的および指針の枠組みが適性であるかを評価すること、および管理や協力のための仕組みなどの機関の枠組みの適格性を評価することに重きを置いた。

監査では産業セクターの目標・目的の達成を評価することも行われた。

監査は2011年から2015年を対象に行われた。国民会議は2015年12月にRAAに監査を依頼した。

クエンセル 6/14

P1 よりつづく

眞子さまがブータンを ●●●●●●●

るなど、精力的に活動された。つづく6日目は、聖地タクツァンへトレッキングに向かわれ、無事参詣されて、すべての公式行事を終えられた。翌朝、パロ空港より帰国の途につかれた。

ご帰国後、宮内庁を通じて発表された、ご訪問の印象を次のように述べられた、「パロ国際空港へ降り立つ飛行機の窓よりヒマラヤ山脈を望み、緑あふれる景色を眼前にした瞬間を幾度も思い返します」という言葉からは、ブータン訪問を心待ちにされていたお気持ちが伝わってきます。「今後とも、日本とブータンが寄り添える関係でありますよう、そして両国の友好親善関係がますます深まりますよう願っております」とのお言葉の通り、眞子さまのご訪問が、両国のさらなる友好につながることは間違いないであろう。

注：1面トップの写真はクエンセル6/3より

P3 よりつづく

タイとブータンをつなぐ ●●●●●●●

すことや出家教団が存在することは、むしろタイ仏教とブータン仏教との間に近さを感じさせる。この点について、今枝さんは「大乗仏教は在家信者に重きを置いた仏教であり、在家仏教的側面を前面に押し出すが、出家教団は継続したのであり、彼らは上座部と同じ戒律を守った」のに対し、「在家主義に基づく日本には、出家僧侶の集団、すなわち僧伽が存在しない」と書いている。また、チベット仏教にはお墓がなく、タイ仏教徒にもお墓がない。その他の点については、専門的になるので詳細には触れないが、今枝さんは、仏・法・僧の三法に帰依する三(法)帰依が日本のほとんどの信者にないのが現状であるとも書き、日本仏教の特殊性について触れている。

ワンディ・ノルブさん（後の財務大臣）と、1988年のミッション訪問時のレセプションで

次号へ続く

竜人往来

■ツェリン・デルマ記者歓迎会

5月21日、4月13日から3か月の予定で佐賀県の中山鉄工所で研修中の2名のブータン人の取材のため5月16日から来日していたThe Bhutanese社のツェリン・デルマ記者の歓迎会の茶会が横浜市旭区二俣川の本多麻里子邸で開かれた。主催はNPO法人国際建設機械専門家協議会（白井一理事長、日・ブ協会理事）、日・ブ協会が後援した。

歓迎会は、まずは，準会席料理を食した後に、本多麻里子さんからお茶のお点前が披露され、デルマ記者を含む参加者12名が、純和風のおもてなしを楽しんだ。休憩後、桜植樹専門家の吉田氏夫人がブータン国歌と「さくらさくら」をオカリナで演奏、その後、ツェリン・デルマ記者が、お点前に挑戦、スジャを作る要領で抹茶を攪拌し、2服目からは彼女のお点前が供された。

前列中央がツェリン・デルマさん

ツェリン・デルマ記者は、23日までの来日中に、ブータン人の取材だけでなく、岡山市や大阪、名古屋の企業や自動車博物館を取材した。また、関西大学学長、共同通信社玉井和紗記者、国際開発ジャーナル社、金野孝子品川区議、高瀬ひろみ参議院議員、河井克之事務所などを訪問・面談した。

歓迎会には、日・ブ協会からは小島誠二会長、森靖之副会長が出席した。

発行：日本ブータン友好協会　編集：ブータン編集委員会　〒112-0013 東京都文京区音羽2-11-18-402
©2006 The Japan-Bhutan Friendship Association
www.japan-bhutan.org　E-mail : info@japan-bhutan.org　Tel / Fax : 03-3945-3396